岷山の隠士

国枝史郎

青空文庫

1

「いや彼は隴西の産だ」
「いや彼は蜀の産だ」
「とんでもないことで、巴西の産だよ」
「冗談を云うな山東の産を」
「李広の後裔だということだね」
「涼武昭王※の末だよ」
——青蓮居士謫仙人、李太白の素性なるものは、はっきり解っていないらしい。
金持が死ぬと相続問題が起こり、偉人が死ぬと素性争いが起こる。
偉人や金持になることも、ちょっとどうも考えものらしい。

李白十歳の初秋であった。県令の下に小奴となった。
ある日牛を追って堂前を通った。
県令の夫人が欄干に倚り、四方の景色を眺めていた。
穢らしい子供が、穢らしい牛を、臆面もなく追って行くのが、彼女の審美性を傷付けたらしい。
「無作法ではないか、外をお廻り」
すると李白は声に応じて賦した。
「素面欄鉤ニ倚リ、嬌声外頭ニ出ヅ、若シ是織女ニ非ズンバ、何ゾ必シモ牽牛ヲ問ハン」
これに驚いたのは夫人でなくて、その良人の県令であった。
早速引き上げて小姓とした。そうして硯席に侍らせた。
ある夜素晴らしい山火事があった。
「野火山ヲ焼クノ後、人帰レドモ火帰ラズ」
県令は苦心してここまで作った。後を附けることが出来なかった。
「おい、お前附けてみろ」
県令は李白へこう云った。
十歳の李白は声に応じて云った。
「焔ハ紅日ニ随ツテ遠ク、煙ハ暮雲ヲ逐ツテ飛ブ」
県令は苦々しい顔をした。それは自分よりも旨いからであった。
五歳にして六甲を誦し、八歳にして詩書に通じ、百家を観たという寧馨児であった。田舎役人の県知事などが、李白に敵うべき道理がなかった。
ある日美人の溺死人があった。
で、県令は苦吟した。
「二八誰ガ家ノ女、飄トシテ来リ岸蘆ニ倚ル、鳥ハ眉上ノ翠ヲ窺ヒ、魚ハ口傍ノ朱ヲ弄ス」
すると李白が後を継いだ。
「緑髪ハ波ニ随ツテ散リ、紅顔ハ浪ヲ逐ツテ無シ、何ニ因ツテ伍相ニ逢フ、応ニ是秋胡ヲ想フベシ」
また県令は厭な顔をした。
で李白は危険を感じ、事を設けて仕を辞した。
詩的小人というものは、俗物よりも嫉妬深いもので、それが嵩ずると偉いことをする。
李白の逃げたのは利口であった。
剣を好み諸侯を干して奇書を読み賦を作る。——十五歳迄の彼の生活は、まずザッとこんなものであった。
年二十性※儻、縦横の術を喜び任侠を事とす。——これがその時

代の彼であった。

財を軽んじ施を重んじ、産業を事とせず豪嘯す。――こんなようにも記されてある。

ある日喧嘩をして数人を切った。

土地にいることが出来なかった。

このころ東巖子という仙人が、岷山の南に隠棲していた。で、李白はそこへ走った。

聖フランシスは野禽を相手に、説教をしたということであるが、東巖子も小鳥に説教した。彼は道教の道士であった。

彼が山中を彷徨っていると、数百の小鳥が集まって来た。頭に止まり肩に止まり、手に止まり指先へ止まった。そうして盛んに啼き立てた。

それへ説教するのであった。

李白はそこへかくまわれることになった。

ある日李白が不思議そうに訊いた。

「小鳥に説教が解りましょうか？」

「馬鹿なことを云うな、解るものか。あんなに無暗と啼き立てられては、第一声が通りゃアしない」

「何故集まって来るのでしょうか？」

「俺が毎日餌をやるからさ。小鳥にもてるのもいいけれど、糞を掛けられるのは閉口だ」

一度彼が外出すると、彼の道服は鳥の糞で、穢ならしい飛白を織るのであった。

「一体道教の目的は、どこにあるのでございましょう？」

ある時李白がこう訊いた。

「つまりなんだ、幸福さ」

「幸福を得る方法は？」

「長命することと金を溜めることさ」

洵にあっさりした答えであった。

2

「どうしたら金が溜まりましょう？」

「働いて溜めるより仕方がない」

「その癖先生はお見受けする所、ちっとも働かないじゃありませんか」

「うん、どうやらそんな格好だな」

「働かないで溜める方法は？」

「よくこの次までに考えて置こう」

一向張り合いのない挨拶であった。

「どうしたら長命が出来ましょう」

「いろいろ方法があるらしい」

「それをお教え下さいませんか」

「俺には解っていないのだよ」

「物の本で読みました所、内丹説、外丹説、いろいろあるようでございますね。抱木子などを読みますと」

「ほほう、それではお前の方が学者だ。ひとつ俺へ話してくれ」

李白これには閉口してしまった。

ある日東巖子が李白へ云った。

「天とは一体どんなものだろう？」

「ははあこの俺を験す気だな」

すぐに李白はこう思った。

「道教の方で申しますと、天は百神の君だそうで、上帝、旻天、皇天などとも、皇天上帝、旻天上帝、維皇上帝、天帝などとも、名付けるそうでございますが、意味は同じだと存じます。天は唯一絶対ですが、その功用は水火木金土、その気候は春夏秋冬、日月星辰を引き連れて、風師雨師を支配するものと、私はこんなように承わって居ります」

「ふうん、大変むずかしいんだな。俺にはそんなようには思われないよ。色が蒼くて真丸で、その端が地の上へ垂れ下っている。こんなようにしか思われないがな」

これには李白もギャフンと参った。

「地についてはどう思うな?」

これは浮雲いと思いながらも、真面目に答えざるを得なかった。

「地は万物の母であって、人畜魚虫山川草木、これに産れこれに死し、王者の最も尊敬するもの、冬至の日をもって方沢に祭ると、こう書物で読みましたが」

「お前の云うことはむずかしいなあ。俺にはそんなようには見えないよ。変な色の、変に凸凹した、穢ならしいものにしか見えないがね」

これにも李白は一言もなかった。

「お前は人の性をどう思うね?」

「はい、孔子に由る時は、『人之性直。罔之生也。幸而免』こうあったように思われます。しかし孟子は性善を唱え、荀子は性悪を唱えました。だが告子は性可能説を唱え、又楊雄、韓愈等は、混合説を唱えましたそうで」

「だがそいつは他人の説で、お前の説ではないじゃアないか」

「あっ、さようでございましたね」

「で、お前はどう思うのだ?」

「さあ、私には解りません」

「解るように考えるがいい」

「あの、先生にはどう思われますので?」

「俺か、俺はな、そんなつまらない事は、考えない方がいいと思うのさ。形而上学的思弁といって、浮世を小うるさくするものだからな」

これには李白は何となく、教えられたような気持がした。

「不味い物ばかり食っていると、肉放れがして痩せてしまう。美味物を食え美味物を」

こう口では云いながら、稗だの粟だの黍だのを、東巌子は平気で食うのであった。

「綺麗な衣裳を着るがいい。そうでないと他人に馬鹿にされる」

こう云いながら東巌子は、一年を通してたった一枚の、穢い道服を着通すのであった。

「出世をしろよ、出世をしろよ、いい主人を目つけてな」

こう云いながら東巌子は、山から出ようとはしないのであった。

彼は言行不一致であった。

それがかえって偉かった。

彼は盛んに逆理を用いた。

李白は次第に感化された。※儻不羈の精神が、軽快洒脱の精神に変った。

ある日突然東巌子が云った。

「お前は山川をどう思うな?」
「山は土の盛り上ったもの、川は水の流れるもの、私にはこんなように思われます」
「さあさあお前は卒業した。山を出て世の中へ行くがいい」
——で、翌日岷山を出た。

3

開元十二年のことであった。
李白は出でて襄漢に遊んだ。まず南洞庭に行き、西金陵揚州に至り、さらに汝海に客となった。それから帰って雲夢に憩った。
この時彼は結婚した。妻は許相公の孫娘であった。
数年間同棲した。
さらに開元二十三年、太原方面に悠遊した。
哥舒翰などと酒を飲んだ。
また※郡の元参軍などと、美妓を携えて晋祠などに遊んだ。
やがて去って斉魯へ行き、任城という所へ家を持った。孔巣父、裴政、張叔明、陶※、韓準というような人と、徂徠山に集って酒を飲み、竹渓の六逸と自称したりした。
こうして天宝元年となった。
この時李白四十二歳、詩藻全く熟しきっていた。
会稽の方へ出かけて行った。
※中に呉※という道士がいた。
二人はひどくウマが合った。共同生活をやることにした。
東巌子に比べると呉筠の方は、ちょっと俗物の所があった。それだけにその名は喧伝されていた。
時の皇帝は玄宗であった。
「剡中の呉筠を見たいものだ」
こんなことを侍臣に洩らした。
呉筠の許へ勅使が立った。
出て行かなければならなかった。
「おい、お前も一緒に行きな」
「うん、よし来た、一緒に行こう」
李白は早速行くことにした。
やがて二人は長安へ着いた。
長安で賀知章と懇意になった。
賀知章は李白を一見すると、驚いたようにこう云った。
「君は人間なのか仙人なのか?」
「どうもね、やはり人間らしい」
「仙人が誤って人間になると、君のような風采になるだろう。君は謫せられた仙人だよ」
「まあさ、見てくれ、謫仙人の詩を」
李白は旧稿を取り出して見せた。
賀知章はすっかり参ってしまった。
「素晴らしい物を作りやアがる。こいつちょっと人間業じゃアねえ。君のような人間に出られると、僕の人気なんかガタ落ちだ。だがマアマア結構なことだ。御世万歳、文運隆盛、大いに友達に紹介しよう」
「話せる奴でもいるのかい?」
「杜甫という奴がちょっと話せる」
「聞かないね、そんな野郎は」

「だが会って見な、面白い奴だ。だがちっとばかり神経質だ」
「そんな野郎は嫌いだよ」
「まあまあそういわずに会って見なよ。君とは話が合うかもしれない。ひょっとかすると好敵手かもしれない」
「幾歳ぐらいの野郎だい？」
「そうさな、君よりは十二ほど若い」
「面白くもねえ、青二才じゃアないか」
「止めたり止めたり食わず嫌いはな」
「どうも仕方がねえ、会うだけは会おう」

杜甫は名門の出であった。

左伝癖をもって称された、晋の杜預の後胤であった。曾祖の依芸は鞏県の令、祖父の審言は膳部員外郎であった。審言は一流の大詩人で、沈※期、宋之門と名を争い、初唐の詩壇の花形であった。

父の閑は奉天の令で、公平の人物として名高かった。

杜甫は随分傲慢であった。弱い癖に豪傑を気取り、不良青年の素質もあった。ひどく愛憎が劇しかった。それに肺病の初期でもあった。立身出世を心掛けた。その顔色は蒼白く、その唇は鉛色であった。いつもその唇を食いしばっていた。人を見る眼が物騒であった。相手の弱点を見透しては、喰い付いて行くぞというような、変に物騒な眼付であった。威嚇的な物の云い方をした。その癖すぐに泣事を云った。

決して感のいい人間ではなかった。

体質から云えば貧血性であったが、気質から云えば多血質であった。

いつも不平ばかり洩らしていた。

だが意外にも義理堅く、他人の恩を強く感じた。

忠義心が深かった。

義理堅いののぞきさえすれば、彼は実に完全に、近代芸術家型に嵌まった。

彼の幼時は不明であった。

が、彼の詩を信じてよいなら——又信じてもよいのであるが——七歳頃から詩作したらしい。

「往昔十四五、出デテ遊ブ翰墨場、斯文崔魏ノ徒、我ヲ以テ班揚ニ比ス、七齢思ヒ即チ壮、九齢大字ヲ書シ、作有ツテ一襄ニ満ツ」

すなわちこれが証拠である。

「七歳ヨリ綴ル所ノ詩筆、四十載、向フ矣、約千有余篇」

こんなことも書いてある。

開元十九年二十歳の時、呉越方面へ放浪した。

四年の間を放浪に暮らし、開元二十三年の頃、京兆の貢挙に応じたものである。

だが旨々落第してしまった。

4

彼はすっかり落胆した。

奉天の父の許へ帰って行った。泰山を望んで不平を洩らした。

二年の間ブラブラした。

それから斉や趙に遊んだ。

それから長安へ遣って来たのであった。

李白と杜甫との会見は、賀知章が心配したほどにもなく、非常に円滑に行なわれた。

会後李白が賀知章へ云った。

「彼は頗る人間臭い。それが又彼のよい所だ。詩人として当代第一」また杜甫はこう云った。

「なるほどあの人は謫仙人だ。僕はすっかり面喰ってしまった。詩人としては第一流、とても僕など追っ付けそうもない」

互いに推重をしあったのであった。

李適之、汝陽、崔宗之、蘇晋、張旭、賀知章、焦遂、それが杜甫と李白とを入れ、八人の団体が出来上ってしまった。

飲んで飲んで飲み廻った。

いわゆる飲中の八仙人であった。

酒はあんまりやらなかったが、一世の詩宗高適などとも、李白や杜甫は親しくした。

三人で吹台や琴台へ登り、各自感慨に耽ったりした。

※慨するのは杜甫であり、物を云わないのは高適であり、笑ってばかりいるのは李白であった。

高適の年五十歳、李白の年四十四歳、杜甫の年三十二歳であった。

だがこの時代は李太白が、誰よりも詩名が高かった。

玄宗皇帝が会いたいと云った。

で、李白は御前へ召された。

誰が李白を推薦したかは、今日に至っても疑問とされている。

ある人は道士呉筠だと云い、ある人は玉真公主だと云い、又ある人は賀知章だと云った。

すべて人間が出世すると、俺が推薦した俺が推薦したと、推薦争いをするものであるが、これも将しくその一例であった。

金鑾殿という立派な御殿で、玄宗は李白を引見した。

帝、食を賜い、羹を調し、詔あり翰林に供奉せしむ。——これがその時の光景であった。非常に優待されたことが、寸言の中に窺われるではないか。

彼は翰林供奉となっても、出勤しようとはしなかった。長安の旗亭に酒を飲み、いう所の管ばかりを巻いていた。

「李白に会いたいと思ったら、長安中の旗亭を訪ね、一番酔っぱらっている人間に、話しかけるのが手取早い。間違いなくそれが李白なのだからな」

人々は互いにこんなことを云った。

その時唐の朝廷に一大事件が勃発した。

渤海国の使者が来て、国書を奉呈したのであった。

国書は渤海語で書かれてあった。満廷読むことが出来なかった。

玄宗皇帝は怒ってしまった。

「蕃書を読むことが出来なければ、返事をすることが出来ないではないか。渤海の奴らに笑われるだろう。彼奴ら兵を起こすかもしれない。国境を犯すに相違ない。誰か読め誰か読め！」

百官戦慄して言なし矣であった。

そこへ遣って来たのが李白であった。

飄々乎として遣って来た。

「お李白か、いい所へ来た。……お前、渤海語が解るかな？」

「私、日本語でも解ります。まして謂んや渤海語など」

「それは有難い。これを読んでくれ」

渤海の国書を突き出した。

李白は一通り眼を通した。
「では唐音に訳しましょう」
そこで彼は声高く読んだ。
「渤海奇毒の書、唐朝官家に達す。爾、高麗を占領せしより、吾国の近辺に迫り、兵屡吾界を犯す。おもうに官家の意に出でむ。俺如今耐うべからず。官を差し来り講じ、高麗一百七十六城を将て、俺に譲与せよ。俺好物事あり、相送らむ。太白山の兎、南海の昆布、柵城の鼓、扶余の鹿、鄭頡の豚、率賓の馬、沃州綿、※泌河の鮒、九都の杏、楽遊の梨、爾、官家すべて分あり。若し高麗を還すことを肯んぜずば、俺、兵を起こし来たって厮殺せむ。且つ那家が勝敗するかを看よ」
皇帝はじめ文武百官は、すっかり顔色を変えてしまった。
「いま辺境に騒がせられては、ちょっと防ぐに策はない。一体どうしたらいいだろう」
風流皇帝の顔色には、憂が深く織り込まれた。
誰一人献策する者がなかった。

5

すると李白が笑いながら云った。
「文章で嚇して来たのです、文章で嚇して帰しましょう。蕃使をお招きなさりませ、私、面前で蕃書を認め、嚇しつけてやることに致します」
翌日蕃使を入朝せしめた。
皇帝を真中に顯官が竝んだ。
紗帽を冠り、白紫衣を着け、飄々と李白が現われた。勿論微醺を帯びていた。
座に就くと筆を握り、一揮して蕃書を完成した。
まず唐音で読み上げた。
「大唐天宝皇帝、渤海の奇毒に詔諭す。むかしより石卵は敵せず、蛇龍は闘わず。本朝運に応じ、天を開き四海を撫有し、将は勇、卒は精、甲は堅、兵は鋭なり。頡利は盟に背いて擒にせられ、普賛は鵞を鑄って誓を入れ、新羅は繊錦の頌を奏し、天竺は能言の鳥を致し、沈斯は捕鼠の蛇を献じ、払林は曳馬の狗を進め、白鸚鵡は訶陵より来り、夜光珠は林邑より貢し、骨利幹に名馬の納あり、沈婆羅に良酢の献あり。威を畏れ徳に懐き、静を買い安を求めざるなし、高麗命を拒ぎ、天討再び加う。伝世百一朝にして殄滅す。豈に逆天の咎徴、衝大の明鑒に非ずや。況や爾は海外の小邦、高麗の附国、之を中国に比すれば一郡のみ。士馬芻糧万分に過ぎず。螳怒是れ逞うし、鵝驕不遜なるが若きだに及ばず。天兵一下、千里流血、君は頡利の俘に同じく、国は高麗の続とならむ。方今聖度汪洋、爾が狂悖を恕す。急に宣しく過を悔い、歳事を勤修し、誅戮を取りて四夷の笑となる毋れ。爾其れ三思せよ。故に諭す」
実にどうどうたるものであった。
皇帝はすっかり喜んでしまった。
そこで李白は階を下り、蕃使の前へ出て行った。文字通り蕃音で読み上げた。
蕃使面色土のごとく、山呼拝舞し退いたというが、これはありそうなことである。
奇毒、すなわち渤海の王も、驚愕来帰したということである。

「俺は長安の酒にも飽きた」

で、李白は暇を乞うた。

皇帝は金を李白に賜った。

李白の放浪は始まった。北は趙魏燕晋から、西は※岐まで足を延ばした。商於を歴て洛陽に至った。南は淮泗から会稽に入り、時に魯中に家を持ったりした。斉や魯の間を往来した。梁宋には永く滞在した。

天宝十三年広陵に遊び、王屋山人魏万と遇い、舟を浮かべて秦淮へ入ったり、金陵の方へ行ったりした。

魏万と別れて宣城へも行った。

こうして天宝十四年になった。

ひっくり返るような事件が起こった。

安祿山が叛したのであった。

十二月洛陽を陥いれた。

天宝十五年玄宗皇帝は、長安を豪塵して蜀に入った。

李白の身辺も危険であった。宣城から漂陽にゆき、更に※中に行き廬山に入った。

玄宋皇帝の十六番目の子、永王というのは野心家であったが、李白の才を非常に愛し、進めて自分の幕僚にした。

安祿山と呼応して、永王は叛旗を飜えした。弟の襄成王と舟師を率い、江淮に向かって東下した。

李白は素敵に愉快だった。

「うん、天下は廻り持ちだ。天子になれないものでもない」

こんな事を考えた。

詩人特有の白昼夢とも云えれば、※儻不羈の本性が、仙骨を破って迸しったとも云えた。

意気頗る軒昂であった。自分を安石に譬えたりした。二十歳代に人を斬った、その李白の真骨頭が、この時躍如としておどり出たのであった。

「三川北虜乱レテ麻ノ如シ、四海南奔シテ永嘉ニ似タリ、但東山ノ謝安石ヲ用ヒヨ、君ガ為メ談笑シテ胡沙ヲ静メン」

などとウンと威張ったりした。

「試ミニ君王ノ玉馬鞭ヲ借リ、戎虜ヲ指揮シテ瓊筵ニ坐ス、南風一掃胡塵静ニ、西長安ニ入ッテ日延ニ到ル」

凱旋の日を空想したりした。

ところが河南の招討判官、李銑というのが広陵に居た。永王の舟師を迎え討った。

永王軍は脆く破れた。

永王は箭に中って捕えられ、ある寒駅で斬殺された。そうして弟の襄成王は、乱兵の兇刃に斃された。

李白は逃げて豊沢に隠れたが、目つかって牢屋へぶち込まれた。

「どうも不可ねえ、夢だったよ」

憮然として彼は呟いた。

「兵を指揮するということは、韻をふむよりむずかしい。そうすると俺より安石の方が、人殺しとしては偉いらしい。もう君王の玉馬鞭なんか、仮にも空想しないことにしよう……。ひょっとかすると殺されるかもしれねえ。何と云っても謀反人だからなあ、もう一度洞庭へ行って見たいものだ。松江の鱸を食ってみたい。女房や子供はどうしたかな？　幾人女房があったかしら？　あっ、そうだ、四人あったはずだ」

李白はちょっと感傷的になった。

無理もないことだ、五十七歳であった。

李白は皆に好かれていた。

新皇帝粛宗に向かって、いろいろの人が命乞いをした。

宣慰大使崔渙や、御史中丞宋若思や、武勲赫々たる郭子儀などは、その最たるものであった。

そこで李白は死を許され、夜郎へ流されることになった。

道々洞庭や三峡や、巫山などで悠遊した。

李白はあくまでも李白であった。竄逐されても悲しまなかった。

いや一層仙人じみて来た。人間社会の功業なるものが全然自分に向かないことを、今度の事件で知ってからは、人間社会その物をまで、無視するようになってしまった。

乾元二年に大赦があった。

まだ夜郎へ行き着かない中に、李白は罪を許された。

そこで江夏岳陽に憩い、それから潯陽へ行き金陵へ行った。この頃李白は六十一歳であった。また宣城や歴陽へも行った。

あっちこっち歩き廻った。

到る所で借金をした。九割までは酒代であった。

のべつに客が集まって来た。

やがて宝応元年になった。

ある県令に招かれて、采石江で舟遊びをした。

すばらしく派手やかな宮錦袍を着、明月に向かって酒気を吐いた。

波がピチャピチャと船縁を叩いた。

十一月の月が水に映った。

「ひとつ、あの月を捕えてやろう」

人の止めるのを振り払い、李白は水の中へ下りて行った。

水は随分冷たかった。

彼の考えはにわかに変わった。

どう変わったかは解らない。

李白は水中をズンズン歩いた。

やがて姿が見えなくなった。

それっきり人の世へ現われなかった。

「李白らしい死に方だ」

人々は愉快そうに手を拍った。

東巌子は岷山にいた。

相変わらず小鳥の糞にまみれ、相変らずぼんやりと暮らしていた。

ある日薄穢い老人が、東巌子を訪れて来た。

「先生しばらくでございます」

「誰だったかね、見忘れてしまった」

老人は黙って優しく笑った。

なるほどまさしく薄穢くはあったが、底に玲瓏たる品位があった。

人間界のものであり、同時に神仙のものである、完成されたる品位であった。

で、東巌子は思わず云った。

「お貴郎は老子様で？」

「いえ私は李白ですよ」

「いえ貴郎は老子様です」

東巌子は云い張った。

「どうぞ上座へお直り下さい」

李白は平気で上座へ直った。

数百羽の小鳥が飛んで来た。音を立てて庵の中へ入った。

そうして東巌子の頭や肩へ……いや小鳥は東巌子へは行かずに、李白の頭や肩へ止まった。すぐに李白は糞まみれになった。

今でも岷山のどの辺りかに、李白とそうして東巌子とが、小鳥を相手に日向(ひなた)ぼっこをして、住んでいる事は確かである。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集　巻六」未知谷
　　1993（平成5）年9月30日初版発行
初出：「大衆文芸」
　　1926（大正15）年4月
※漢詩漢文の読み下し文の旧仮名づかいは底本通りです。また促音の大小の混在も底本の通りです。
入力：阿和泉拓
校正：門田裕志、小林繁雄
2005年10月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

岷山の隠士

国枝史郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/